

除雪の省力化 PF
i-Snow通信 Vol.1

プラットフォーム〈第1回〉を開催しました。

- 平成 29年 3月 28日(火)13:00～、札幌第1合同庁舎 会議室にて開催
- 当該プラットフォームの通称(案)
『i-Snow』の承認



議事(1) プラットフォーム設立の背景・課題 議事(2) プラットフォームの活動概要

- 北海道大学大学院工学研究院の萩原教授を座長に選任
- 各委員より【各機関の実状や課題】を説明(抜粋)

▼北海道 若山課長、札幌市雪対策室 國兼課長、他

- ・除雪機械オペレータの高齢化は、全く同様の課題。
- ・機械の老朽化も切迫しており、このような場で連携し省力化に向けた取組を進めたい。

▼寒地土木研究所 大槻上席研究員

- ・当機関でも「視程障害時の走行支援」について研究を進めており同じ目標に向けて連携していきたい。

▼NEXCO東日本 中谷技術部長

- ・今後、熟練オペレータが益々減少する中、ICT活用は極めて重要。
- ・野口先生に指導頂き、準天頂衛星によるGPS精度向上に合わせた実地試験を行う予定。

▼北海道大学大学院 農学研究院 野口教授

- ・内閣府の「戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)」の「次世代農林水産業創造技術」議長として参画。
- ・農業部門では実証実験により成果を得ているところだが、公道の自動走行には多くの課題があり、このような一般道での除雪機械の取組は、SIPでも関心が高いと思われる。



議事(3) 暴風雪による通行止めの現状と将来の目標(案) 議事(4) プラットフォームでの具体的な取組(案)

- 議事(3)(4)の説明に対し、座長・各委員によりディスカッション(抜粋)

▼具体的な取組・年度計画は概ね了承。

▼農業機械も除雪機械と同様、乗用車に比べてはるかに台数は少ない(市場規模が小さい)。

▼近年、乗用車に搭載しているミリ波レーダ等は格段に安価になっており、自主開発に拘らず、乗用車で開発された技術を取り込み、極力、市販機器を利用することで費用の軽減を考えるべき。

▼メーカーや機関が技術革新で競合すると、どうしてもロスが発生する為、本PFでは、メンバー相互の協力・調整によって仕様を統一する等の議論も行うべき。

▼除雪車のアシスト技術や自動運転の実証実験を春山除雪(知床峠)で試みることは、ファーストライアルとして望ましく、報道機関等も取り上げてくれるのではないかと。

▼実証実験(知床峠)では、大手メーカーの市販車ベースの除雪トラックや除雪グレーダでは無く、ベース車両から製作・開発が可能なロータリ除雪車を用いることが妥当。

▼様々な道路で自動運転を行うには、1:500以上の詳細なデジタルマップが必要な為、フォーマットの標準化等、国全体で進めるべき。

▼効率化という側面で、限られた機械をどう有効に運用・活用するのかを、まさに農業でのICT技術として進めているが、除雪も同様と思う。

▼北海道全体の経済発展の上でも、この企画(PF)が発信源となるべく、ここにいるメンバーひとり一人に頑張ってもらいたい。